

---

 巻 頭 言
 

---

## 企業における情報処理特集号の編集に当って

三 浦 大 亮\* 今 野 衛 司\*

コンピュータが日本で実務に利用されるようになって 10 年以上になります。その間の応用上の進歩には著しいものがありますが、一口に言って技術上の発展に較べてそれが十分に大きかったかどうかについては、常に疑問に思っていたところです。それは技術上の発展が実務上の要求と合致していたかどうかという点も含めてのことです。もしそれが不十分であったとすれば、その原因が何んであるかを調べてみなければなりませんし、また原因を取り除く努力もしなければならぬでしょう。

一方、技術的發展のために日夜努力されている研究者・技術者からは、その成果が実務にどのように役立てられているのか、また求められている発展の方向がどうなのか、現在の実務上の問題点解決のために直接効果のあるテーマがあるのか、というような質問が出されることがあります。

本誌編集委員会ではこのような一般的な気持ちと、先般行なった本誌についてのアンケートに見られる実務関係記事への要望を取りあげ、可能な限り具体的な方策を実行していこうということになりました。手始めとして今回の特集を発行することにし、その作業を私たちが引きうけたのです。そこでこの紙面を借りてこの特集の目的と今後の考え方について若干述べてみたいと思います。

この特集の目的は次の 4 つに要約されます。

- 1) 代表的な実務応用の対象を研究・技術者に知ってもらう。
- 2) 進んだ応用技術を他社の例から実務家自身が学ぶ。
- 3) これを機会に実務応用面での論文・解説等を読者から積極的に投稿してもらうようにする。
- 4) 本誌のイメージを実務方面にも拡大する。

特に今後のことを考えると 3) が最大の目的となります。従来から本誌の学術的性格のため実務上の成果

あるいは創造の発表がなされないものとして、読者から敬遠されていたと思われます。もちろんこれを避けるために本誌の本来あるべき学術的性格を変えるということはありませんが、学術の実質的進歩に貢献しまたその実務面への適用を拡大することに役立つものであれば、たとえ純粋の研究活動から生まれた所論でなくても研究論文あるいはそれと同等の価値あるものとして扱うことができると思います。その内容の選択および記述の方法については、実務上の啓蒙雑誌とは当然違ったものになるはずですが、まだその典型的パターンができあがっていない実情であれば、当分の間はいくらかの形式・内容上の不ぞろいが起きるとしても、この特集を手始めとしてまず実績を次々と積み重ねていくことが必要です。

これらはいずれもコミュニケーションの円滑化のためのものです。ところでコミュニケーションの障害の最大なものはその億劫さにあると思われます。億劫さの要因としては、媒体を得ること、媒体に合った方法をとること、必要な材料をまとめておくこと、公表の可否を決定することなどがあげられます。

実際にこの特集を編集してみて、筆者の方々の状況がいろいろと推察されました。特に公表の範囲・可否についてかなり神経が払われていて、必要以上に防衛的な表現になり深い説明を過剰に敬遠しているのではないかと感じました。ところが一方ではアンケートにあるような意見が多くあるのです。お互いの進歩のために高い立場に立ってある程度胸襟を開く必要があると思います。また企業としても一般的に学術・技術の進歩に貢献するような活動に理解を持たないということは考えられないことで、担当者自身がかえって遠慮しすぎているということもあろうかと思えます。

これからはもっと自由に積極的に密度の高いものを投稿してもらえるような雰囲気を持っていきたいので、会員の皆さんの協力をお願いします。

\* 担当編集委員